

# 南山背の古代寺院と瓦積基壇

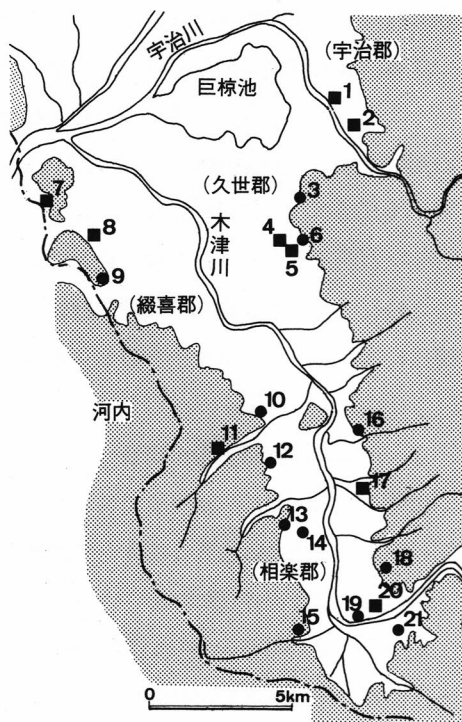
辻本和美

## 1. はじめに

6世紀末から8世紀初頭にかけて建立された飛鳥・白鳳期の古代寺院は、都が置かれた近畿地方に最も多く分布する。その内山背(山城)国は、大和、河内、近江に次いで多く、現在40ヶ所近い当時期の寺院跡の存在が知られている。本稿で扱う南山背地域の古代寺院跡については、これまでに様々な方面からの論究が試みられ、優れた成果が積み重ねられている。ここではこれらの業績を踏まえ、特に、当地域の古代寺院に特徴的な瓦積基壇について、最近の発掘調査の成果を借りながら検討してみたい。

## 2. 瓦積基壇の沿革

基壇の形態は、<sup>(注1)</sup>外粧(化粧)に用いられる資材や構造、加工の程度によって大きく、(1)切石及び壇正積基壇、(2)瓦及び塼積基壇、(3)玉石及び乱石積基壇、(4)木造基壇に分けられる。このうち瓦積基壇は、屋根瓦を代用するという利便性と構築の容易なことから、古代寺院の基壇外装として広く用いられた。瓦積基壇は、中国に起源をも



■ 瓦積基壇の確認された寺院跡

第1図 南山背の主要古代寺院跡

- |          |          |           |
|----------|----------|-----------|
| 1. 岡本廃寺  | 2. 大鳳寺跡  | 3. 広野廃寺   |
| 4. 平川廃寺  | 5. 久世廃寺  | 6. 正道廃寺   |
| 7. 西山廃寺  | 8. 志水廃寺  | 9. 美濃山廃寺  |
| 10. 興戸廃寺 | 11. 普賢寺跡 | 12. 三山木廃寺 |
| 13. 下狛廃寺 | 14. 里廢寺  | 15. 樋ノ口遺跡 |
| 16. 井手寺跡 | 17. 蟹満寺跡 | 18. 松尾廃寺  |
| 19. 泉橋寺跡 | 20. 高麗寺跡 | 21. 燈籠寺廢寺 |

つ塼積の簡略形態として三国時代の高句麗と百済に流行したものとされ、百済では、定林寺跡や軍守里廢寺等、都城内に所在する寺院のほとんどに瓦積基壇がみられる。<sup>(注2)</sup>百済寺院

における瓦積基壇は、伽藍中樞部だけでなく、回廊や門・食堂といった周辺建物にも多く採用されており、当時期の標準的基壇外装としての位置を占めている。

日本へは、百濟滅亡後(663年)に渡来した百濟系工人達によって伝えられ、大津京内の官寺に採用されるとともに、各地にひろまったとされている。特に、近江や山背に遺例が多く、その分布のあり方から、主に渡来系氏族に関係する寺院にみられることが指摘されている。<sup>(注3)</sup> 渡来系氏族と瓦積基壇の関係については、瓦積基壇の少ない地域とされてきた大和でも、従来の山村廃寺塔跡、秋篠寺北方建物跡例に加え、最近の調査で桧隈寺講堂跡<sup>(注4)</sup>、巨勢寺講堂跡<sup>(注5)</sup>、長林寺金堂跡等<sup>(注6)</sup>でも確認されており、これらの寺院の造営氏族が渡来系氏族と何らかの結びつきをもつことから、積極的に肯定する意見も出されている。<sup>(注7)</sup>

なお、導入時期に関しては、滋賀県穴太廃寺で7世紀前半に遡る例が想定され、従来考えられていたよりも古くなる可能性が説かれて<sup>(注8)</sup>いる。これについては、穴太廃寺創建伽藍の建物基壇は、再建伽藍により大きく削平されており上部の構造が不明であること、創建・再建期建物の使用軒丸瓦は、いずれも、7世紀第3四半期の大津京時代のものであることなど問題点もあり、今後の検討課題と思われる。瓦積基壇については、構築の簡便なことの反面、損壊し易く、後世の補修を受けた部分が多くみられる。創建時の基壇外装の復原にあたっては、当初からの部分と補修部分との見極めが重要であるとされる。

### 3. 南山背の瓦積基壇の構造

山背地域において、現在まで何らかの調査によって瓦積基壇が確認されている飛鳥白鳳期の軒瓦を出土する古代寺院としては次の例がある。

葛野郡：北野廃寺(講堂跡)

愛宕郡：北白川廃寺(塔跡・東方堂宇跡)

乙訓郡：檜原廃寺(八角塔跡)

宇治郡：大鳳寺跡(金堂跡)、岡本廃寺(金堂跡)

久世郡：久世廃寺(塔跡・金堂跡・講堂跡)、平川廃寺(塔跡・金堂跡)

綴喜郡：志水廃寺、西山廃寺(金堂跡?)、普賢寺跡(塔跡)

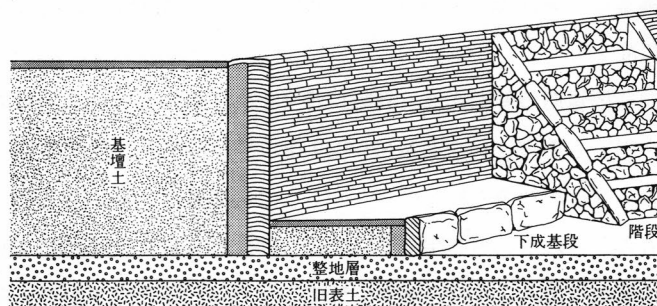
相楽郡：高麗寺跡(塔跡・金堂跡・講堂跡)、蟹満寺(金堂跡)

以上のように、12箇所の寺院跡で瓦積基壇が確認されており、建物別では、塔6例、金堂7例、講堂3例、不明建物2例となる。すなわち、堂塔の一部が明らかとなった寺跡のほとんどが瓦積基壇を採用している様相が窺われる。ここでは、旧巨椋池以南の南山背地域(宇治・久世・綴喜・相楽の四郡)に所在する寺院跡を中心に、瓦積基壇のあり方について概観してみたい。

(宇治郡)

<sup>(注10)</sup>  
大鳳寺跡(宇治市大字  
菟道小字西中)

宇治川東岸の丘陵裾部に形成された扇状地上に立地する。昭和59年の第5次調査で、従来、塔跡と推定されてきた瓦積基壇が金堂跡と判明した。また、金堂跡の東側で塔跡と思われる基壇状の高まりがみつき、法起寺式伽藍配置が想定されている。



第2図 大鳳寺跡金堂基壇模式図(引用文献 注10による)

また、金堂跡の東側で塔跡と思われる基壇状の高まりがみつき、法起寺式伽藍配置が想定されている。

**金堂跡** 南北に下成基壇を施した二重(重成)基壇状で、規模は、下成基壇を含めた南北長17.8m、上成部で16.1mを測る。東西長は、復原で約19.5mを測る。基壇瓦積は、寺域整地面から直接、平瓦を積み上げるもので、地覆石等はみられない。瓦を積む際に黄色粘土を用いて接着部を補強する。この黄色粘土は、基壇盛土の裏込めにも充填される。瓦積は、平瓦側面を外側に、凸面を上積みすることを基本とするが、完全な平瓦側面を利用したものは少なく、外側に破断面を向けるものが多いとされる。使用平瓦は全て、桶巻作りで凸面に格子タタキをもつ奈良時代前期のものである。下成基壇は、幅90cm、高さ30cm程で外縁に人頭大の河原石を立て並べ、基壇上面には黄色粘土を敷く。すなわち、瓦積本体は、下成基壇分だけ隠れることになる。下成基壇の築造時期については、瓦積の隠れる箇所とその上部の使用瓦に違いがなく、時期差はないとされる。基壇南辺の中央には、石積の階段が敷設されている。

<sup>(注11)</sup>  
岡本廃寺(宇治市大字五ヶ所小字岡本)

旧巨椋池東岸の河岸段丘上に立地する。昭和60年に発掘調査が行われ、瓦積基壇の金堂や講堂跡とされる掘立柱建物跡等の主要伽藍が確認された。金堂跡の西側では、塔心礎の残欠と思われる花崗岩の巨石が検出され、法隆寺式伽藍配置が復原されているが、回廊の簡略化と思われる柵列が講堂の両脇に取り付く点が異なり、金堂と講堂の位置関係からみて、摂津伊丹廃寺に類似した伽藍配置が想定されている。

**金堂跡** 基壇は後世の削平を受け遺存状態が悪く、東西約16.7m、南北約6m分が検出された。瓦積は、東辺基壇の下部がかろうじて残る。地山を削り出した基壇の上に盛土を行い、瓦積はその前面に旧地表面から直接積み上げている。平瓦を主体に、丸瓦・軒平瓦・鵜尾片を混入する。側面を外側に向ける小口積みを基本とするが、破断面や端面を向けるものもあり整美さはない。瓦の接合及び裏込めには黄色粘土を用いている。

講堂は、東西棟の桁行6間(12.4m)、梁行4間(8.7m)の規模をもつ掘立柱建物で、南北に廂をもつ。

伽藍創建期の軒丸瓦は、外縁に珠文を配する川原寺亜式系軒丸瓦と法隆寺式軒丸瓦の系統を引くもので、いずれも670年以降の7世紀後半に編年されるものである。また、7世紀末～8世紀初頭の軒瓦の存在から、この頃に、屋根の葺き替えや基壇の補修が行なわれたものとされる。当寺院については、法隆寺式軒丸瓦や結紐文垂木先瓦の存在から、同じ宇治郡北部にある法淋寺跡や醍醐廢寺との強い結び付きが考えられている。

(久世郡)

久世廢寺<sup>(注12)</sup>(城陽市大字久世小字芝ヶ原)

西へ延びる丘陵の西南端部に位置する。久世神社の境内に二基の土壇が東西に残り、その配置から法起寺式伽藍配置が想定されてきた。昭和50・54・55年の発掘調査によって、塔・金堂・講堂・中門・回廊等の伽藍主要部が判明した。

**塔跡** 良好な土壇の遺存状態に反し、基壇外粧は全体的に残りが悪いが、金堂跡と同様に瓦積が想定されている。基壇は、基礎に掘り込み地業を行なう。掘り込み地業の範囲は、一辺約13.4mで、これによって基壇の規模が復原できる。基壇北辺では、基礎に平瓦を立て並べた痕跡が検出され、これを地覆としてその上に平瓦を積み上げて行く構造が考えられている。礎石抜き取り痕から、初層一辺6.3mの三重塔が復原される。南・北辺には、階段が敷設されていた。心礎は抜き取り跡から地下式とみられる。

**金堂跡** 塔跡基壇の西辺から8.9m西側に基壇の東辺がくる。基壇の規模は、東西26.7m、南北21.3m、高さは現状で1.14mが遺存する。掘り込み地業はみられない。瓦積の遺存状態は悪く、地覆に当たる石材や瓦は用いられていないが、基底部に溝を掘り、その内部に瓦片を詰めて基礎とし、その上半裁平瓦を平積みにする。比較的残りの良い東辺部では、平瓦5段分(14cm)が遺存するが、それから上部は、土層の乱れがない版築土が続き、当初から瓦積は基段上縁まで施工されていなかった可能性が考えられている。

**講堂跡** 塔・金堂の中軸から北側47.6mの間隔を置いて基壇の南端がくる。基壇の規模は、東西23.5m、南北13mである。瓦積は、整地面に直接、半裁平瓦を平積するが、丸瓦を入れたり端面を外にする箇所もあり、金堂基壇に比べ整美さに欠ける。南辺中央に階段を敷設する。建物規模は、桁行7間(21m)、梁行4間(10.5m)の四面廂で、身舎(5間×2間)は礎石建ち、廂は掘立柱とする特殊な構造をもつ。建物中軸の方位は、塔・金堂と異なっており築造時期の差を示すものと考えられる。北回廊は、講堂の南で閉じていたらしい。なお、講堂の廢絶時期は、出土した土師器から9世紀前半から10世紀頃と推定される。

出土瓦は、飛鳥様式の素弁文(奥山久米寺式)を最古とし、奈良時代末～平安時代初頭ま

でのものがみとめられるが、出土数の最も多いのは、7世紀末頃の川原寺壺式(平川廃寺類似)の複弁文の軒丸瓦で、塔・金堂の創建時期を示すものとされる。講堂の造営は、それらよりやや後れる時期と考えられる。

(注13)  
平川廃寺(城陽市大字平川小字古宮)

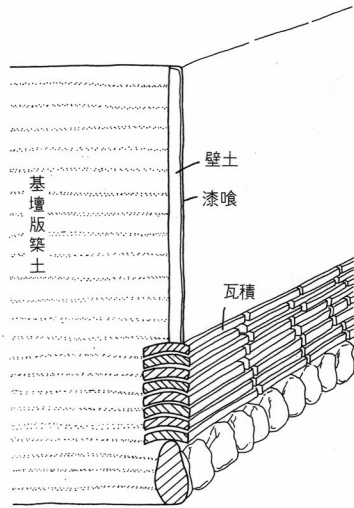
昭和41年以降の数回の調査によって主要伽藍が判明した。塔を西、金堂を東に置く法隆寺式伽藍配置をもち、東西1町半、南北1町の寺域が想定されている。

塔跡 瓦積基壇は、一辺17.2mで、高さは約1.5mが遺存する。瓦積は、基底に長径30cm前後の玉石を立てて地覆とし、その上半裁平瓦を平積にする。一部に丸瓦や軒平瓦(平城宮式)を混えている。基壇の隅部は崩壊がひどく、後世に大規模な補修が加えられている。

良好に残る部分では8段(旧表から約50cm)に積み重ねられ、これから上は、瓦積に替わって版築土が直立して露出する。周辺の瓦堆積層からは、壁土片が出土しており、このことから、築造当初は、基壇の上縁まで瓦積は施されておらず、漆喰仕上げの壁土で基壇化粧を施していたことが想定されている。壁土は早くに崩落し、塔の焼失以前には、版築の多くの部分は露出していたことが、版築面の焼け痕や煤の付着からうかがえる。塔建物は、礎石据付痕から初層一辺10.5m(各柱間は3.5mの等間)の規模に復原されており、地方寺院としては異例の、七重塔級であったと推定されている。

金堂跡 塔基壇の東8.6mに金堂基壇西辺がくる。トレンチ調査の結果、東西22.5m、南北17.2mの規模が確認された。高さは約70cmが遺存する。主軸方位、基壇の南北の奥行きは塔基壇辺に一致する。瓦積は、塔と同様に玉石を地覆とし、その上に平瓦を平積する。上面は削平を受けていたが、桁行5間、梁行4間の建物が復原されている。基壇南辺には、幅2.2m、高さ約30cmの後補の基壇が付け加えられている。外装は、地覆石の上に平瓦を積むもので旧の基壇と一致する。後補基壇を増築する際、旧基壇南辺の外装は外されていたが、東南隅では、南辺に続く瓦積の一部が残っていた。後補基壇の正面(南辺)には、瓦積は行なわれていなかったようで、おそらく、当初の建物の孫廂を設け規模拡張を計るため、前面にスローブ状の壇を付け加えたものと考えられている。時期については、塔の補修と同時期の奈良時代末が想定されている。

出土瓦は、奈良時代前期から奈良時代後期末頃まで多種の型式がある。奈良時代前期の軒瓦は、周辺寺院跡と同範のものが含まれ、その多くは搬入品とみられる。塔・金堂跡に



第3図 平川廃寺塔基壇復原模式図  
(引用文献 注13aによる)

伴う軒瓦の大部分は、平城宮式のものであり、中心伽藍の基壇外装の構築時期は、8世紀後半頃と考えられている。

(綴喜郡)

志水<sup>(注14)</sup>廃寺(八幡市大字志水小字月夜田)

八幡丘陵の山裾部に位置する。昭和52年の調査で、瓦積基壇をもつ建物跡の一部が確認された。

建物跡は、西北角を含む、北辺で8m、西辺で10m分が検出された。基壇の瓦積は、整地層に直接、長さ40cm程の平瓦を側面を向けて置き、二段目より上はやや控え積み気味に、推定で約60cmの高さまで平積する。中段より上では、小さな瓦片や平安時代初頭とみられる軒丸瓦が差し込まれており、明らかに後補と思われる部分も認められた。西北隅部には、角の保護と瓦積の基点を示すと思われる縦長の石材が置かれていた。

調査報告では、北辺部は、二重に瓦積が施されていたとされる。外側の瓦列は、最上段だけが明確な列を成すが、それ以外は整然と瓦を積んだ状態ではなかったらしい。内側の瓦列は約10cm程間隔を開け二列に並べられていた。写真図版では、内側の瓦列が本来の北辺基壇とも見えるが、詳しい記載がないため不明である。基壇上面の2ヶ所で礎石の抜き取り痕が検出されている。なお、この瓦積基壇の北側約30mの所で東西方向に延びる瓦落ちが確認されており、回廊ないし築地跡が想定されている。

出土軒瓦のうち出土数の最も多いのは、奈良時代前期の単弁6葉蓮華文軒丸瓦で、重弧文軒平瓦とともに創建瓦に比定される。この他、鬼面文軒丸瓦など特異な軒瓦もみられる。

西山<sup>(注15)</sup>廃寺(八幡市大字男山小字男山長沢)

丘陵上に位置し、昭和46年の調査によって塔跡とその東側から金堂跡(東方建物跡)と思われる基壇の一部および築地跡が検出された。塔跡は一辺5.2mの規模をもつが、心礎とその他の礎石群が検出されたのみで基壇については未調査である。

金堂(東方建物)跡 基壇西側部分が検出されており、遺存した礎石の配置から、南北(梁行)3間、東西(桁行)4間以上の東西方向の建物が想定されている。基壇外装は、礫石を混じえる瓦積基壇であったとされるが、詳細については不明である。建物跡の方位は、塔跡に対し20度程東に振っており、造営時期が異なる可能性がある。

当寺跡については、和氣清麻呂建立の足立寺とする伝承があるが、出土瓦には、奈良時代前期から平安・鎌倉時代ものがみられ、創建時期は7世紀後半に遡る。

普賢<sup>(注16)</sup>寺跡(綴喜郡田辺町大字普賢寺小字下大門)

現在、観音寺として法灯を伝え、国宝乾漆十一面観音像を安置する。郡名を冠して筒城大寺とも呼ばれ、寺伝によれば天武朝の創建とされる。現本堂の西南の丘陵上に、中央に

凹みをもつ心礎が遺存し、三重塔跡と想定されている。かつて、瓦の採集を目的とした調査で、ここから瓦積基壇の一部がみつがっている。基壇の下底に石を敷きその上に平瓦を積上げたもので、瓦積には、軒瓦が多用されていたらしいが、詳細については不明である。

寺域から出土する軒瓦によれば、創建時期は奈良時代前期前葉と想定される。なお、当時期の寺院跡の伽藍配置からみれば、塔の位置が中枢から離れているが、河内高井田廃寺（鳥坂寺跡）例のように、地形に合わせたものと考えられる。

（相楽郡）

高麗寺跡<sup>(注17)</sup>（相楽郡山背町大字上狛小字高麗寺他）

南に木津川を望む段丘上に立地し、古くからその存在が知られてきた。飛鳥時代に遡る南山背最古の寺で、法起寺式伽藍配置をもつものと考えられてきた。昭和59年度から5ヶ年計画で寺域保護の為の発掘調査が実施され、各堂塔跡の詳細が判明した。

**塔跡** 良好な瓦積基壇が残る。基壇の一辺12.7mを測り、高さは約80cmが遺存する。階段部の復原から本来の基壇高は、1.5m程であったと想定される。瓦積は、地山面ないし整地層から直接積み上げられており、半裁平瓦の凸面を上、側面を正面に向けた平積を基本とする。しかし、重弧文軒平瓦の瓦当面や平瓦端面及び破断面を小口積みにしている箇所も認められ、後者の部分は、補修と考えられている。使用された平瓦は、全て伽藍整備期の白鳳期（7世紀後半）に属するものである。瓦の積上げ面や内側の石積との裏込めには、黄色粘土が充填されている。また、周辺からは、多量の埴が出土しており、基壇上面に敷かれたか、または上縁の葛石の代わりに使用されたものと推測されている。基壇の外周には、幅1.7mの範囲で円礫が敷かれており、外縁に当たる部分ではやや大ぶりの石が並べられていた。この石敷は、瓦積の後に行われており、瓦積の最下段は石積によって隠れる。なお、塔跡東辺では、東回廊に延びる石敷きが確認されている。

この塔跡基壇の特徴としては、瓦積の内側に石積が巡ることである。石の大きさや積み方等是不規則であるが、全て基壇の外側に向けて面を揃えている。石積は、瓦積と同様、地山ないし整地面に直接据えられているが、基壇の内側はやや深くなっており、掘り込み地業が成されているらしい。この石積については、瓦積に先行する基壇外装とする考え方と、瓦積への土圧を和らげる補強施設とする考え方がある。後者は、他に類例がなく、前者の説が有力とされる。基壇南面には、石積の階段が遺存するが、当初のものでなく、9世紀段階に下るものとされる。基壇断ち割り調査の結果、心礎は基壇土の整地前に据えられ、復原基壇の上面から約1.1mに心礎の上面が来ることが明らかになった。

**金堂跡** 塔基壇東辺の約8.2m西に金堂基壇西辺がくる。基壇規模は、南北13.4m、東西は推定16mを測る。塔跡と同様、外周に幅1.1mの石敷きが巡る。瓦積は、基本的に塔



跡と同じであるが、より整美で、塔跡基壇の北西角では、北辺と西辺の瓦積が交互に噛み合うように積まれているのに対し、金堂北東角では、北面瓦積の端面は全て揃えられていた。使用瓦は、半裁又は1/3に打ち欠いたものを用いる。基壇版築土の裏込め内には、多くの瓦片が詰められていた。建物規模は、桁行5間(11.7m)、梁間4間(9m)に復原される。

**講堂跡** 塔・金堂の北側約17.8mに講堂基壇の南縁がくる。基壇規模は、東西23.7m、南北推定19.5mを測る。基壇高は、80cm程と復原されている。塔・金堂に対し、主軸方向をやや東へ振る。瓦積は、塔・金堂と異なる点が多い。瓦積は、30cm大の円礫を地覆石として長辺を揃えて並べ、やや内側に控えた位置から半裁平瓦を平積みにするが、一部に半裁丸瓦を混じえる。金堂の瓦積に比べ整美さに欠ける。使用瓦は伽藍整備期(白鳳期)のものであるが、基壇東辺の東回廊の取り付け部では、上段に縄目叩きをもつ平瓦が使われており、奈良時代頃に補修があったものとみられる。基壇の外周には、幅30cmで外縁に自然石を二列に並べた雨落ち状の施設が敷設され、東西両脇には、回廊基壇が取り付けく。基壇上面には、2ヶ所に礎石が現存しており、桁行5間(19.3m)、梁行4間(15.2m)の建物が想定される。

出土軒瓦は、軒丸瓦20型式24種、軒平瓦14型式16種と多いが、大半は、奈良時代前期の伽藍整備期に比定されるものである。川原寺創建瓦と同範の複弁軒丸瓦は、金堂跡周辺で多く出土しており、その後出形式である川原寺亜式(高麗寺式)の軒丸瓦が塔・講堂跡にみられることから、670年前後に金堂の造営が開始され、塔、講堂の順に造営されたものと想定されている。

<sup>(注18)</sup>**蟹満寺**(相楽郡山背町大字綺田小字浜)

東方から派生する丘陵の端部に立地し、国宝の銅造釈迦如来像を本尊として法燈を伝えている。この釈迦如来像については、白鳳期造立説と天平期の二説があり、また、その伝来についても、他の寺院からの移座説、蟹満寺旧伝説等、古くから論争が闘わされてきた。平成2年の発掘調査で、現本堂の西側から金堂跡と推定される瓦積基壇が検出された。

**金堂跡** 二重に巡る瓦積をもつ重成瓦積基壇である。瓦積は上下二段からなり、遺存状況の良い基壇北辺部によれば、下段の瓦積は、平瓦を4段(高さ約10cm)に積上げ、その最上段の瓦積面を基底として上段の瓦積がはじまる。下段の瓦積と上段の瓦積間隔は約30cmである。上段の瓦積の高さは、裳階用と推定される遺存礎石の高さから約25cm程(平瓦8段分)と考えられている。瓦積は、半裁平瓦を整地層上に直接積上げるもので、下段瓦積の上面については、特に外装施設等は確認されていない。瓦積には、平安時代の瓦が混じり補修が行なわれたものと思われる。基壇規模は、南北が下段で約17.8m、上段で約17.2mを測る。基壇東西長は、現本堂に安置されている釈迦如来像が本来の位置を移動してい



付表 南山背の瓦積基壇一覧表 数値( )は推定

寺院名	建物	瓦積形式	基壇規模 (m) 東西×南北	建物規模 (m)	備考
大鳳寺跡	金堂	A2	(19.5) × 17.8		二重基壇
岡本廃寺	金堂	A2	16.7 ×		
久世廃寺	塔	A2	一辺13.4	一辺6.3	掘込み地業
	金堂	A2	26.7 × 21.3		
	講堂	A2	23.5 × 13	21[7間] × 10.5[4間]	庇掘立柱建物
平川廃寺	塔	A1	一辺17.2	一辺10.5	
	金堂	A1	22.5 × 17.2	[5間] × [4間]	
志水廃寺	東方建物	A2			金堂?
西山廃寺	金堂?	A?			
普賢寺跡	塔	A			心礎
高麗寺跡	塔	A2	一辺12.7		心礎
	金堂	A2	(16) × 13.4	11.7[5間] × 9[4間]	
	講堂	A1	23.7 × (19.5)	19.3[5間] × 15.2[4間]	
蟹満寺	金堂	A2	(28) × 下段17.8	(23.2) × (13) [7間] × [4間]	二重基壇
(参考：北山背)					
北野廃寺	塔	A	(18) ×	[7間] × [4間]	平安時代?
北白川廃寺	塔	A1	一辺13.6		石積に改修
	東方堂宇	A1		(36) × (23)	金堂?
檜原廃寺	八角塔	A2	一辺5.07 対辺12.27		心礎

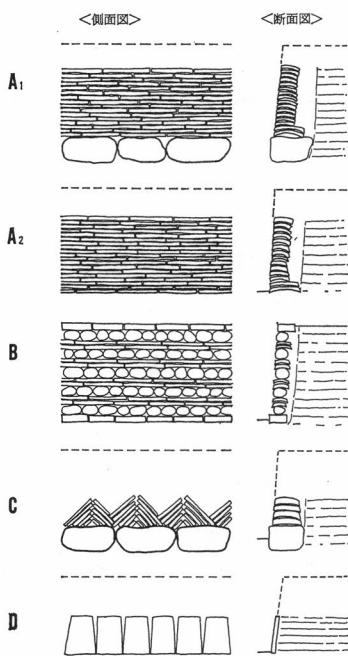
ないとみられることから、それを中心にして約28m(下段部)と復原されている。これは、奈良薬師寺の金堂基壇とほぼ同規模で、桁行7間(23.2m)・梁行4間(13m)の四面廂に裳階を敷設する重閣風の建物が想定されている。

創建瓦は、高麗寺と同範関係をもつ、いわゆる高麗寺式軒丸瓦で、高麗寺の造営時期との関連から7世紀後半と想定される。なお、平安時代末から鎌倉時代初頭に火災により焼失したものと考えられている。

#### 4. 南山背の瓦積基壇の構造

瓦積基壇は、田辺氏の分類によれば<sup>(注19)</sup>、平瓦を平積するもの(A形式)を基本形として、平瓦平積の間に玉石を並べ交互に積むもの(B形式)、平瓦を合掌積又は斜積するもの(C形式)、平瓦凸面を前に基壇に立て並べるもの(D形式)に分けられる。

南山背の古代寺院の瓦積基壇は、詳細が不明な西山廃寺金堂を除けば、いずれもA形式に属する。西山廃寺例は、瓦積に礫を混じていたとされるから、使用資材の点では、B形式に近い可能性もある。瓦積基壇として最も一般的なA形式は、A1:地覆石をもつも

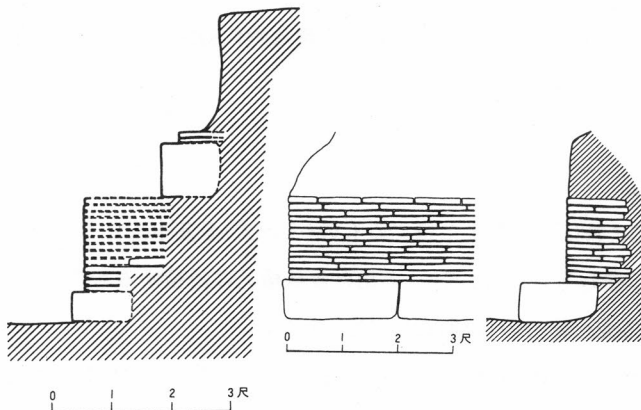


第4図 瓦積基壇の形式  
(引用文献 注3による)

のと、A2：もたないものに细分される。平川廃寺塔・金堂と高麗寺跡講堂及び普賢寺跡塔が前者のA1、さらに北山背の北白川廃寺例もこの形式に属しているが、南山背の寺院跡では、地覆石をもたないA2形式に属するものが大半を占めている。ただし、瓦積の基礎部分や瓦相互の合わせ方等、細部については、それぞれの寺跡毎に独自の構造をもつことが窺われる(附表)。

なお、平川廃寺塔・金堂跡の地覆石と瓦積部分の形状は、南滋賀廃寺塔・金堂跡や崇福寺弥勒堂跡で確認されているような、地覆石の上縁から瓦積を少し内側に控えて積み上げるものではなく、地覆石の前面と瓦積の面を揃えて積み上げている。地覆石も小ぶりの円礫である。近江の二寺の遺例が瓦積基壇の導入期のものであるのに対し、平川廃寺例は、奈良時代後期の築造とされ、A1形式の中でも後出するものである。

大鳳寺跡金堂・蟹満寺金堂は、二重基壇をもつ。大鳳寺跡金堂例は、瓦積基壇の前面に縁石をもつ低い基壇を付け加えるもので、瓦積部分との時期差はないとされている。類例は、先に述べた南滋賀廃寺金堂跡(第5図)や鳥取県上淀廃寺金堂・塔跡<sup>(注21)</sup>にみられるが、大鳳寺跡例が建物基壇の南北二面のみに存在する点が異なる。蟹満寺金堂の下成基壇からは、裳階の柱を受ける礎石が検出されており、その規模から、奈良薬師寺金堂との類似性が指摘されている。二重(重成)基壇は、瓦積基壇と同様、



第5図 南滋賀廃寺の金堂(左)と塔(右)瓦積基壇  
(引用文献 注20による、一部改変)

朝鮮三国時代に流行したもので、百濟寺院では下成基壇に礎石を配し、飛鳥寺の東西両金堂のように軒の支え柱や裳階を巡らしたとされている<sup>(注22)</sup>。蟹満寺金堂の二重基壇については、百濟寺院との関連も視野に入れる必要があるものと思われる。

なお、飛鳥山田寺の造

営経緯にみられるように、古代寺院の造営に当たっては、長期間を要したことが窺われる。基壇外装については、建物完成後の最終段階になってから施工されるものであり、瓦積の築造時期については、建物跡周辺から出土する屋根葺瓦と共に、瓦積に使われた瓦類の細かな観察が必要と思われる。

## 5. 南山背の瓦積基壇の導入と展開

南山背の瓦積基壇の導入時期については、川原寺跡と同範の軒丸瓦を伴う高麗寺跡の金堂基壇が、7世紀後半(670年頃)の造営と考えられ、最も古く位置づけられる。その後、塔・講堂と続いて建てられ伽藍整備が行なわれていったとされる。高麗寺跡は、川原寺式同範軒丸瓦の共有関係や塔心礎側面に穿たれた舍利孔の極似性から、再三取り上げてきた近江崇福寺跡や南滋賀廢寺等の大津京の官寺とされる寺院との密接な結びつきが想定されている。瓦積基壇の採用も両者における共通する項目の一つであるが、高麗寺跡金堂・塔跡例では地覆石をもたない点が異なる。高麗寺跡の塔・金堂基壇周囲には、飛鳥地域の宮殿跡や官寺跡とも共通する丁寧な石敷がされていることから、これらは、単に官寺と氏(私)寺の格差からくる簡略化された形というよりも、瓦積基壇の導入当初から両形式が平行して行なわれていたことを窺わしめる。高麗寺跡については、飛鳥寺同範瓦の存在や、近江・大和の天智・天武朝官寺造営の一面に繋がる点からみても、渡来系氏族狛氏の氏寺という枠を越えた中央政権との強い結びつきが窺われ、南山背の古代寺院造営にあたって強い影響と指導力をもったものと思われる。

南山背地域は、川原寺式軒丸瓦の分布密度の濃い地域である。これらの軒瓦は高麗寺の伽藍整備後、特に金堂の造営をまって、郡界を越えて各寺院に採用されていくことが知られている。瓦積基壇もこれらに呼応して、7世紀後半～末頃か遅くとも平城京遷都前後の8世紀初頭にかけて、相次いで南山背の各寺院に採用されていったものと考えられる。

その後、多くの寺院では、恭仁宮遷都前後の8世紀中頃段階に、平城宮式系軒瓦による屋根瓦の葺き替えに合わせて基壇外装の補修を行っており、一部の寺院では、長岡京及び平安京遷都の8世紀後半～9世紀初めの時期に、再度、改修の手を加えていることが窺われる。

## 6. まとめにかえて

先述したように、7世紀後半の白鳳期の南山背は、川原寺式軒丸瓦の卓越する地域である。それに対し、7世紀末頃には、宇治郡北部から北山背地域(紀伊・愛宕郡)にかけて、紀寺式と呼ばれる、雷文縁軒丸瓦が広い範囲に分布することが知られている。<sup>(注26)</sup>川原寺式軒

丸瓦の分布については、壬申の乱の恩賞と絡めてその存在意義が説かれることもあるが、<sup>(注27)</sup>この二つの瓦当文様の違いは、中央政権と寺院建立者である地方豪族(郡司層)との関係強化の時期差を表わすものとの考え方もある。<sup>(注28)</sup>7世紀後半期に、官の関与による造寺活動が南山背でまず起こり、引き続き北山背の地域に広まったと推定されるのである。すなわち、寺院建立にあたっては、新しい技術の確保が不可欠であり、伽藍の設計から資材の調達に至るまで、中央政府からの援助を必要としたものと考えられる。一方、瓦積基壇は、氏族や郡、さらに瓦当文様の違いを越えて、山背の古代寺院に広く採用されている。これは、建築資材としての瓦の入手や構築が容易であったという技術的な面だけでなく、その背後に、山背地域の寺院造営工事に直接係わった共通する技術者(造寺)集団の姿が窺われる。この問題に関しては、今回ふれなかった、各寺院の伽藍配置や建物構造等の比較検討が不可欠であり、今後に残された課題としたい。

現在、瓦積基壇が確認されている南山背の寺院跡の多くで、堂塔の造営や改修に伴う瓦窯跡が寺域の近接地からみつかっており、<sup>(注29)</sup>瓦の自給体制が整っていたことが窺われる。瓦窯については、構築の際に窯壁面に瓦積が用いられることが多く、瓦積基壇と技術的に共通する面がみられる。奈良時代には、一般に「瓦工」と称された瓦生産に係わる技術者達は、直接的な瓦作りだけでなく、屋根葺き・瓦窯の造築・修理等にも携わっていたと考えられている。おそらく、瓦工人も何らかの形で瓦積基壇の施工や修理に携わったものと推測されるが、これに関しても今後の課題としたい。

恭仁宮大極殿の後身である山城国分寺金堂跡の発掘調査では、基壇裾部から、丸瓦や半裁平瓦が並べられた状態で検出されている。<sup>(注30)</sup>これが基壇外装の瓦積の痕跡を示すものとするれば、山背では、天平18年(746年)の国分寺造営に当たっても瓦積基壇を採用していることになり、瓦積基壇に対する根強い伝統が窺われる。

(つじもと・かずみ=当センター調査第2課調査第3係長)

注1 大脇 潔「いろいろな基壇化粧」(『古代の寺を考える』 帝塚山考古学研究所) 1991

注2 藤沢一夫「古代寺院の遺構に見る韓日の関係」(『アジア文化』第8巻第2号) 1971

注3 田辺征夫「古代寺院の基壇一切石積基壇と瓦積基壇」(『原始古代社会研究』4 原始古代社会研究会) 1978

注4 飛鳥資料館『渡来人の寺—檜隈寺と坂田寺—』 1983等

注5 河上邦彦「奈良県巨勢寺跡発掘調査概要」(『日本考古学年報40』 日本考古学協会) 1987

注6 河合町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所『長林寺跡』(河合町文化財調査報告書第3集) 1990

注7 小笠原 好彦「寺を建てた氏族たち—大和・山背・近江—」(前掲注1)

- 注8 注1に同じ
- 注9 林 博通「穴太廃寺」(『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会) 1989
- 注10 宇治市教育委員会『大鳳寺跡発掘調査報告』(宇治市文化財調査報告 第1冊) 1987  
以下、調査報告の出典については、代表的なものにとどめる。
- 注11 「岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要」(『宇治市文化財調査概報 第10集』宇治市教育委員会) 1987
- 注12 a 「久世廃寺発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第4集 城陽市教育委員会) 1976  
b 「久世廃寺第3次発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第9集 城陽市教育委員会) 1980  
c 「久津川遺跡群発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第10集 城陽市教育委員会) 1981
- 注13 a 「平川廃寺発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第1集 城陽市教育委員会) 1973  
b 「平川廃寺発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第3集 城陽市教育委員会) 1975
- 注14 a 「八幡丘陵地所在遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1969)』京都府教育委員会) 1969  
b 江谷 寛『志水廃寺跡発掘調査報告』八幡市教育委員会 1978
- 注15 京都府・八幡町教育委員会『西山廃寺(足立寺)発掘調査概報』 1971
- 注16 鷹野一太郎「普賢寺跡」(『田辺町遺跡分布調査概報』田辺町埋蔵文化財調査報告書 第3集 田辺町教育委員会) 1982、基壇の状況については、田辺町教育委員会 鷹野一太郎氏のご教授を得た。
- 注17 山城町教育委員会『史跡 高麗寺跡』(京都府山城町埋蔵文化財発掘報告書 第7集) 1989
- 注18 山城町教育委員会『山城町内遺跡発掘調査概報 蟹満寺—第1次調査—』(京都府山城町埋蔵文化財発掘報告書 第9集) 1991
- 注19 注3に同じ
- 注20 林 博通「崇福寺跡」「南滋賀廃寺」(前掲注9)
- 注21 鳥取県淀江町教育委員会『上淀廃寺と彩色壁画』 1992
- 注22 注2に同じ
- 注23 中島 正「考察一軒瓦からみた高麗寺の沿革—」(『史跡 高麗寺跡』京都府山城町埋蔵文化財発掘報告書 第7集 山城町教育委員会) 1989
- 注24 注23及び、八瀬正雄「考察—山城の白鳳寺院の瓦の文様—」(前掲注10)、森下 衛「南山城における川原寺式軒丸瓦について」(『史想』21 京都教育大学考古学研究会) 1988等がある。
- 注25 森 郁夫「畿内における平城京式軒瓦の一側面」(『國學院雑誌』78-9 國學院大学) 1977
- 注26 京都府山城郷土資料館 展示図録2『山城の古瓦』 1983

注27 高橋美久二「山城国葛野・乙訓両郡の古瓦の様相」(『史想』第15号 京都教育大学考古学研究会) 1974

注28 森 郁夫「古代山背の寺院造営」(『学叢』8 京都国立博物館) 1986

注29 寺附属瓦窯一覧

瓦 窯 名	位 置	時 期
山本瓦窯跡(大鳳寺跡)	寺域の南約500m	白鳳創建期
久世廃寺瓦窯跡	東側築地の東約50m	奈良時代後期
平川廃寺瓦窯跡	寺域の北約150m	奈良時代後期
志水廃寺瓦窯跡	寺域の西130m	奈良時代
足立寺瓦窯跡(西山廃寺)	寺域南西隣接地	奈良時代
高麗寺瓦窯跡	寺域南東隅	白鳳期・平安時代

注30 「恭仁宮趾昭和52年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財調査概報(1978)』 京都府教育委員会) 1978

恭仁宮跡とは木津川を挟んで対岸に位置する、甕原離宮推定地の法花寺野遺跡から「土壁様遺構」と呼ばれる瓦積遺構が検出されている。離宮あるいは国分尼寺に関する遺構と考えられているが、焦土や灰層の存在からみて窯跡群の可能性が高い。

佐藤虎雄「法華寺野の遺跡」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告 第十一冊』京都府)

1930